

短報：

## 日本語には異性愛(規範)が内在しているか —性愛の資源としての男言葉・女言葉—

小宮 明彦

### 1. はじめに

20世紀後半から現在にかけて、日本語に異性愛(規範)が内在しているという内容の指摘が積み重ねられてきている(ヴィンセント他1997:100-101、マリィ1998:125-130、中村2007:98・106・109・166、2010:4)。本短報の目的は、それらの言説をめぐって性の体制のありようを確認し、日本語が異性愛(規範)を内包しているかどうかを明らかにしたうえで、性愛の資源としての男言葉と女言葉をめぐって少々のコメントを述べることである。なお、本稿で引用する論考には1990年代後半の辞典を資料として分析したものもあり、2013年現在ではすでに当該の記述は改訂されているかもしれない。しかしながら、日本語のおおまかな性質や在りようは看取できると考え、論考の記述をそのまま参照している。

### 2. 1990年代の研究

1990年代後半より、日本語と異性愛の関係が取りざたされてきている。例えば、ヴィンセント他(1997:100)は以下のように言う。

「ホモ」、「おかま」あるいは「同性愛者」といった言葉は事実上すべての日本人が知っているが、一方で「ノンケ(異性愛者:小宮注)」とか「異性愛者」という単語がただちに分かる人間はわずかな少数派に限られるのだ。この一つをとっても現在の状況の十分な説明になるだろう。

また、『広辞苑』の記述を例にとって、ヴィンセント他(1997)「ノンケ」や「異性愛者」などの語があたかも異性愛社会の巨大なクローゼットに隠れてい

るかのようだ」と指摘しながら、さらに『異性愛』とは、『広辞苑』に収集されるべき独立した語彙というよりもむしろ、『広辞苑』に含まれているすべての言葉の背後のニュアンスを司る、あらゆる言葉の使用に際しての大条件」とも論じられるのではないかと指摘している。

このことは、翌1998年に発表されたマリィ（1998：125-130）の指摘とも符合する。マリィは、「恋」「愛」「恋愛」といった語が辞書の記述において異性同士のものとしてのみ描かれていることを指摘しているだけでなく、『広辞苑』において「性行為」は特に異性間に限定されておらず「性欲に基づく行為。特に性交」とあるが、同辞典で「性交」を引くと「男女の性的な交わり。交接。媾合。房事。」とあるので、「性行為」は異性間のもものと間接的に規定されると述べている（傍点はすべて小宮）。

つまり、日本語において「同性愛者」という言葉がよく知られている一方で「異性愛者」という言葉は一般的でなかったり（「異性愛者」という名付けが一般には用いられないほど異性愛が当たり前とされているため）、辞書において「性交」が「男女の性的な交わり」と定義されていたりするという意味で、日本語は異性愛（規範）を内包していると考えられる。

### 3. 2000年代の研究

2000年代には、言語学者の中村桃子が日本語に異性愛が埋め込まれている旨の指摘を再三行っている。

先に見たように、異性愛のエロスは男女が正反対になることを求める傾向がある。その結果、「わたし」よりも〈男性性〉から遠い「あたし」はより強く女性的セクシュアリティを表現し、「ぼく」よりも〈女性性〉から遠い「おれ」は、より強く男性的セクシュアリティを表現すると考えられる。ここでは、異性愛に求められる男女の違いを強調するために「おれ」「あたし」が重宝ちようほうされている。日本語に複数の自称詞がある理由の一つは、異性愛のセクシュアリティなのである（中村 2007：98）。

「社長」ということばには暗に〈男性性〉が含意されているだけなのに比較して、「女社長」ということばには、はっきりと「女である」ことが明示されている。「女である」ことの中には、当然女性的セクシュアリティも含まれる。同様に、「標準語」の「有徴・例外・周縁」に位置づけられている「女ことば」も、〈女性性〉を前景化する。つまり「女ことば」はそれだけで、異性愛の女性的セクシュアリティを表現する言語資源なのである（中村 2007 : 106）。

また中村は、「私たちは、日本語を学ぶ過程で異性愛規範も学んでいる」（中村 2007 : 109）ことや、まわりの男子が「おれ」を使い始めたころにどうしても「おれ」を使えなかったことをゲイの平野広朗<sup>ひろあき</sup>が述懐していることから、「自分を自分で呼ぶ時に使うことばであり、その人のアイデンティティをもっともはっきりと他の人に表明することばである」自称詞のレポーターに「異性愛が埋め込まれているものしかない」（中村 2007 : 166）ことを指摘している。さらに、「(略) ジェンダーと密接にかかわっている重要概念が『セクシュアリティ (性愛)』である。それは『女／男らしさ』というものが異性愛を前提にしているからだ」と述べている（中村 2010 : 4）。

#### 4. 日本における性の体制

ここで、(日本の) 性体制について確認しておきたい。(日本における) 性体制の論者に、作家で評論家の伏見憲明がいる。伏見は言う。

ぼくたちはまず、〈男というイメージ〉＝〈男制〉に、〈女というイメージ〉＝〈女制〉に欲情しているのです（伏見1991 : 165）。

性<sup>エロス</sup>とはつまるところ、〈男制〉と〈女制〉における〈イメージ〉——この〈イメージ〉という言葉には、それぞれの〈制〉を象徴する肉体に対する視覚的感性ばかりでなく、〈制〉にまつわる関係性の〈物語〉をも含みます——をめぐる欲動です。(略) 僕は性の論理を〈イメージの回収〉と表

現しますが、〈回収〉したい〈イメージ〉は〈男制〉と〈女制〉に限定されます。それはヘテロであろうが、ホモであろうが、バイセクシュアルであろうが変わりません。結局この二つの〈制〉をめぐる欲動にすぎないので。そしてそういうセクシュアリティの文化システムのことを、〈ヘテロ・システム〉とぼくは呼んでいるわけです（伏見 1991：205-207）。

伏見によれば、異性愛女性と同性愛男性は男制に、異性愛男性と同性愛女性は女制に欲情する。「男というジェンダー＝〈男制〉と、女というジェンダー＝〈女制〉の二つの組み合わせで生じるのが性愛、セクシュアリティと言え」、「異性愛であっても同性愛であっても、その二項を基本に成立しているのは同じ」である（伏見2007：71-72）。

なお、「後日、上野千鶴子氏が〈ヘテロ・システム〉では語呂が悪いと思ったのか、それを〈性別二元制〉という言葉に呼び換え」た（伏見 2007：72）。現在では、ヘテロ・システムより性別二元制のほうが人口に膾炙しているようなので、本稿では以下、ヘテロ・システムの代わりに性別二元制という語を用いることとする。

さて、異性愛男性と異性愛女性がそれぞれ女制と男制に惹かれることはよく知られている。そこで、ここでは同性愛女性と同性愛男性がそれぞれ女制と男制に惹かれることを確認したい。

先に中村が言及している、まわりの男子が「おれ」を使い始めたころにどうしても「おれ」を使えなかったことを述懐しているゲイの平野<sup>ひろあき</sup>広朗は、伏見の性別二元制の議論をめぐって、「男か女か、の二分法プラス $\alpha$ のイメージに欲情してしまうというのは、ぼくの場合もそのとおり」と記している（平野 1994：28）。

造形作家でゲイバー店主の大塚<sup>たかし</sup>隆史は、新宿二丁目のおネェさん（文化）を以下のように説明する。

実は、おネェさんというのは「男が女っぽくてどこが悪い！」というメッセージを含んだゲイによる女性性の表現様式なのだ。それも、「どこが悪い

い！」というメッセージを含んでいるがために、いわゆる女性的と言われているもののうち否定的な部分が前面に押し出されている様式だ。これはゲイが創り出した独特な遊びの文化なのだ（大塚 1995 : 33）。

一般の社会ではバカにされる「女の腐ったような奴」を引き受けてしまえば、おネエさんが恐れるものはもう何もない（大塚 1995 : 35）。しかし、「実は、恐いものなしのおネエさんにも一つだけ弱点がある。おネエさんの価値を認められれば認められるほど、男にはもてなくなるのだ」（大塚 1995 : 36）。そうして、その訳を以下のように解説する。

ゲイは「男」に対して性的欲望を持つものだから、おネエさん遊びにうつつを抜かしていたら共感を持ってもらえても自分自身もてなくなってしまう。もてるもてないで言ったら、おネエさん方がいつも口ではバカにするノンケっぽいゲイにはかなわないのだもの（大塚 1996 : 37）。

そう、「ゲイの性的な好みの核になっているのは『男らしさ』」（大塚 1995 : 110）なのだ。

このように、同性愛男性は、性別二元制のうちの男制に惹かれていることが確認できる。では、同性愛女性はどうだろう。

同性愛女性向けの雑誌で連載され、「等身大のレズビアン」と大人気で<sup>(1)</sup>、後に単行本にまとめられた『プリカちゃん』（Cupid Company 1998 : 40）に、同性愛女性が惹かれる性の制度が端的且つ明快に描かれている。7コマから成る漫画の内容はこうだ。主人公のプリカちゃんは、幼少期にいわゆる女らしくない格好をしており、「女らしくしなさい！」と母親に言われ（1コマ目）、長じてからも「またそんな男みたいなかっこして！」と母親に言われ（2コマ目）、「〈地の文として〉ねえ お母さん誰のために女らしくするの？ 〈心の声として〉男のためだろー」と反抗していた（3コマ目）のだが、恋人のマリちゃんに出会って（4コマ目）から、「もう少し女らしく」（5コマ目）、

「いい女になりたいって」(6コマ目)、「初めて思ったんだよ」(7コマ目)と読者に打ち明けて終わる。なお、6コマ目にはお店でセクシーな下着を選ぶ描写もあり(下着を手に、「おっセクシー♡」というプリカちゃんの心の声が文字化されている)、7コマ目では実際にマリちゃんの前でそれを身に付けている。

以上のことから、同性愛女性は女制に惹かれることが確認できる。特に、男性を意識して「女らしく」するように言う母親の言葉を意に介さなかったプリカちゃん自身も、女性の恋人であるマリちゃんを意識して「女らしく」するようになったことは、同性愛女性が女制に惹かれることに関して示唆的である。

## 5. 結語

男言葉や女言葉が男制(=男らしさ)や女制(=女らしさ)を構成する資源の一つであると考えつつこれまで見てきたことをまとめると、「2. 1990年代の研究」の知見を覆すような資料や知見は見られない一方で、「3. 2000年代の研究」で取りあげた中村の知見とは相いれない資料が複数見られた。つまり、2節で確認した、ヴィンセント他(1997)やマリィ(1998)が言うような意味で、日本語には異性愛が内包されていると考えられるが、3節で取りあげた、異性愛に求められる男女の違いを強調するために「おれ」「あたし」が重宝されていたり、女/男らしさというものが異性愛を前提にしていたりする等の議論には、必ずしも首肯できない。

ただし、「私たちは、日本語を学ぶ過程で異性愛規範も学んでいる」という中村(2007:109)の指摘は、中村が言及する日本語の内実は措くとしても、重要である。私たちが好むと好まざるとにかかわらず無意識のうちに行ってしまうかもしれないことに配慮させてくれるからである。女言葉や男言葉は、異性愛に限らず、性愛の資源となり得る。性愛市場においては、男言葉や女言葉を用いて男らしさや女らしさを演出した方が評価を得やすいと言える。別の見方をして男言葉や女言葉を社会方言の一つと考えると、異性愛、同性愛を問わず、人々は「方言コスプレ」<sup>(2)</sup>をして性愛市場に出たほうが効率的と

言える。

その意味で、「ヒロインは『女ことば』を話し続け」<sup>(3)</sup>、「洋画のヒーローたちは、日本人男性が話さない『男ことば』を、キザに、気さくに」話す<sup>(4)</sup>のも得心がいく。ヒロインやヒーローとは、社会が意識的、無意識的に望む女性像（女制）や男性像（男制）の降臨だからである。

同時に、制度の先鋒は常に揺らぎを示してもいる。伏見（2007：127-128）は言う。

この頃では、「イカホモ」<sup>(5)</sup>を求める人が増えています。（略）そのことが何を意味するのか。ぼくが考えるに、ゲイの性愛を構成するジェンダーが、「真の男」とは少しズレたところにある像に変容してきているということです。（略）つまり、「真の男」と自分の間に隙間、遊びがあるという感性が、そのジェンダー表現にはある<sup>(6)</sup>。

性愛市場での発話者の価値を高める男言葉や女言葉は、このように時代と共に微細な変化を経ながら、少なくとももしばらくは生命力を持ち続けるだろう。その行方を、注視していきたい。

#### 注

(1)Cupid Company（1998）の帯の謳い文句より。

(2)田中（2011）より。

(3)中村（2013）の副題より。

(4)中村（2013）の帯より。

(5)伏見（2007：127）によれば、「イカホモ」とは、「いかにもホモっぽいルックスの人のことで、肯定的な意味合いで用いられて」いる。なお、「もっとクローゼットな時代には、ゲイが他のゲイを求める際、『ホモっぽくない人』とか、『普通っぽい人がいい』ということがよく言われ、「それは変態じゃない男、『本物の男』への指向」で、「既存の〈性別二元制〉の〈男制〉への発情とびったり重な」った。「イカホモ」好きの伏見の友人は、「イカホモ」は「雄っぽいんだけど、雌っぽさがあるところ」が好きと言っている。

(6)伏見(2007:125)によれば、ゲイの場合、性愛における欲情は、「筋肉であったり、髪型であったり、ひげであったり、言葉遣いであったり、服装であったり」する(傍点小宮)。よって、伏見のいう「ジェンダー表現」には、男言葉の使用も入ると考えられる。

#### 参考文献

- ヴィンセント、キース・風間孝・河口和也(1997)『ゲイ・スタディーズ』青土社  
大塚隆史(1995)『二丁目からウロコ 新宿ゲイストリート雑記帳』翔泳社  
田中ゆかり(2011)『方言コスプレの時代 ニセ関西弁から竜馬語まで』岩波書店  
中村桃子(2007)『〈性〉と日本語 ことばがつくる女と男』日本放送出版協会  
中村桃子編(2010)『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社  
中村桃子(2013)『翻訳がつくる日本語 ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社  
平野広朗(1994)『アンチ・ヘテロセクシズム』現代書館  
伏見憲明(1991)『プライベート・ゲイ・ライフ ポスト恋愛論』学陽書房  
伏見憲明(2007)『欲望問題』ポット出版  
マリィ、クレア(1998)「性意のあることば」『現代思想』26-10 pp.122-135 青土社  
Cupid Company(1998)『プリカちゃん』OFFICE OUT 「XX」編集部

(こみや あきひこ)